

『助けたいのではなく、助けられる自分でいたい、小さな人間でいい』

東京教区 元評議員 宮南靖（釋賢徳）

ひと月ほど前に何かのテレビ番組で聞いたこんなセリフが気になって、スマホに入力してありました。今日スマホを開いて入力していたことを思い出したのはいいけれども、それが何の番組だったのかが思い出せずあらためてこのセリフを検索すると、放映中の朝ドラでのセリフだと思い出させてくれました。おまけにA Iがその意味を詳しく解説してくれて、セリフの背景や本質に触れることができました。ご関心があればA Iの検索をお試しください。

話は変わりますが、私は4年前からかつて仏社の集まりでご縁を頂いた全国的朋友や僧侶の方々と数名で、LINE ビデオ電話を利用した書籍（図参照など）の輪読会を続けております。ご法話を読みあわせて感想を述べあう一方、それぞれ近況を報告しあっています。

メンバーには、ご自身もご高齢ながら介護施設で先輩のおむつのお世話をしながら夜勤を続けられる方。事業を経営する一方で学習塾を運営し、生徒のさまざまな悩みにも寄り添われている方。また忙しいお仕事に励みながらも、里親になって身寄りのない子どもを救おうとされる方などが居られ、その生々しい近況報告が私にとって格別なものになっています。ことに前述のA Iの解説を読んだことによって、メンバーがはからずも『助けたいのではなく、助けられる自分でいたい、小さな人間でいい』という言葉の本質を体現されているようだと感慨を新たにいたしました。かつて仏社のご講師の先生から『仏教徒の仕事』という言葉がうかがったことを思い出しました。

任期を終え全国に離ればなれで暮らしていても、朋友とは『如来の声をともに聞き救いに身をまかせながら、門徒としての暮らしぶりを学ぶことができる関係』ではないかと、このかけがえのなさをつくづく実感しております。

おそらくいくつもの朋友の輪が、場所や時を超えてつむぎ続けられているであろうことに、仏社のよろこびを感じる次第です。



合掌